



ジェントルハート通信

No. 33 秋号
発行日 2011.11.27

『一番大切にしたい子どもたちの言葉』 理事 玉越 直人

発行
NPO法人
ジェントルハートプロジェクト

事務局
〒210-0843
川崎市川崎区小田栄1-8-3 青山
Tel & Fax
045-845-3620(小森)
E-mail admin@gentle-h.net
URL http://www.gentle-h.net

会員登録及びカンパは随時受付中
正会員 1口 2,000円
賛助会員 1口 1,000円
郵便振替
口座番号:00200-8- 111295
口座名義:ジェントルハートプロジェクト
振込用紙に会員の種別を明記下さい



目次:

| | |
|---------------|-------|
| 巻頭コラム | P 1 |
| 親の知る権利を求めるシホ* | P 2-4 |
| ジェントルハートコンサート | P 5 |
| 校長日記 | P 6 |
| 活動の報告と今後の予定 | P 7 |
| 橋がかかる | P 8 |

ジェントルハート通信第33号
定価100円(会員は無料)

『青い窓』という、福島県郡山市で隔月に刊行されている、福島県の子どもの詩を掲載した「児童詩誌」があります。朝日新聞の「天声人語」で幾度も賞賛された、瑞々しい詩の集積です。昭和33年に創刊され、平成の今に続くばかりか、全国各地にエリア版『青い窓』が広がっています(「青い窓」でホームページが検索できます)。その美しく清らかな詩に惹かれた私は、先日「編集室」をお訪ねしました。創刊以来の主宰者で編集人をつとめられた佐藤浩氏は盲目の詩人。編集室の壁に掲げられた「目で見たら作文、目で聴いたら詩」という同氏の文字がすぐ心に響きましたが、私には「読めば詩、聴けば言葉」とも思える、とても深い言葉でした。紙幅の関係で、ここでは2編ですが、時が流れても変わらない子どもたちの美しい心を感じていただければと思います、紹介させていただきます。

私の席

横山育さん(小学6年)

満員バスに
おばあさんが乗ってきた
ポニーテールの女の人が
「すぐ降りますので」
と席をゆずった
でも その女の方は
次の停留所でも
四つ目の停留所でも降りなかった
私は胸がいっぱいになって
いつもより一つ早い停留所で
バスを降りた
あのポニーテールの女の人
私の席にすわってくれたかなあ

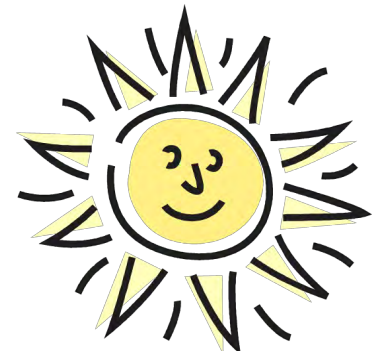
お日様

大井川ひかるさん(小学5年)

お日様の手がふれると
夜は恥ずかしがってにげていく。
やさしいお日様、
とてもいい心をもつお日様の
温かさ、明るさ。
お日様に
みんながつつまれていく。
おはようお日様。
おはよう今日。

子どもたちはみな等しく、明るく、優しい心をもって生まれてきました。私たち大人もみな、昔は子どもだったのだから、今の子どもたちのそばに「優しい心」で寄り添ってあげられると思います。ほんの一步でも前に踏み出せば・・・

毎号送られてくる『青い窓』を読む度に、自然災害と人災、そして風評被害に苦しむ福島の子どものことを案じます。ただ、その子どもたちも、やがて自らの言葉で未来への希望を綴ってくれることでしょう。3月11日のことを決して忘れず、福島の子らの声にじっと耳を傾けていきたいと思います。



◆ 第6回親の知る権利を求めるシンポジウムの報告 ① ◆

去る11月19日、定例総会終了後に、恒例となっている『第6回親の知る権利を求めるシンポジウム』が開催されました。当日はまず被害家族、被害遺族の報告があり、次に、京都精華大学人文学部准教授の住友先生から前半の報告に対するコメントを交えた基調講演があり、最後は理事を加えたパネルディスカッションという流れであつという間の3時間でした。

非常に内容の濃い、充実したシンポジウムでしたので、次回以降の通信でも御紹介したいと思っています。

今回の号では川崎から出席された被害者遺族である篠原さんからの報告をご紹介します。



皆さんこんにちは。私は、川崎市に住む「篠原」と申します。

昨年6月、中学3年生になる息子の「真矢」が、自宅で硫化水素ガスを発生させて亡くなりました。

真矢の死から約1年半。もう二度と真矢には会えないという現実を突きつけられ、今は、亡くなった直後よりも辛い日々をすごしています。

真矢は、シャイで不器用な子でしたが、芯のしっかりした、正義感の強い男の子でした。

遺書にも書いていましたが「困っている人を助け、人の役に立ち優しくしたい」という目標を持っていた子で、亡くなる直前は、将来警察官になりたいと、母親に話していたそうです。

未来に、そんな希望を膨らませていた真矢が、なぜ自らの命を絶たなければならなかったのか？・・・

真矢が死を決意するまでの心の葛藤と、心理状態を克明に分析し、真相を解明してくださったのは、真矢の死後、川崎市の教育委員会から派遣された2名の先生方でした。今でも、毎月7日の月命日には、お2人揃って我が家に足を運んで、私たちと一緒に真矢を語ってくださいます。本当にありがたいことです。

今日は、そのお2人が心血を注いで解明してくださった事実に基づいて、この1年半を振り返り、お話したいと思います。お手元の資料をご覧いただきながら、お話をお聞きくだされば幸いです。

生徒たちの証言によると、真矢へのいじめが始まっ

たのは、2年生の秋頃だと思われます。

発端は、小学校時代から仲の良かった友達(仮にF君とさせていただきます)が、加害生徒4人から心無い言葉の暴力によるいじめを、度々受けていたことから始まります。

それを見過ごすことが出来なかった真矢が、いじめを止めさせようとして、加害生徒に接近したところ、今度は、自らが標的とされてしまいました。

加害生徒4人は、真矢に対して叩く、蹴る、名前を呼び振り向きざまにビンタする、4人で羽交い絞めにしてズボンや下着を下ろすなど、思春期の男の子に対して屈辱的ともいえるいじめを繰り返してきました。

3年生に進級することで、4人の加害生徒たちは、それぞれ別々のクラスになり、真矢に対するいじめはほとんど無くなりました。

しかし依然としてF君や、他の生徒に対する4人のいじめは、行われていたようです。

その光景を見かねた真矢は、5月のある日、4人の加害生徒のうち1人の教科書を、カッターナイフでズタズタに切り裂いてしまうという、報復攻撃に出ました。

真矢がやってしまったことは、調査後すぐに分かったのですが、そのときの担任教師からは、「真矢君が友達教科書をはさみで切ってしまいました。原因は分かりませんが、積もるものがあったようです。教科書は弁償してください。」と電話があり、それ以上は全く詳細が分からないものでした。

真矢の死後、警察が介入してこの事件を調べたところ、教科書は、はさみではなくカッターを使って、特に相手の名前のあるところを中心にズタズタに切り裂かれており、使い物にならないほどの被害だったそうです。相手に対し、どれほどの憎しみを持っていたのか、想像を絶すると言っておられました。

しかし私たちは、その教科書を未だに見せてもらっていません。

せめてあの日、ズタズタになった教科書を見ていれば、対処の仕方も変わったのだろうと思うと、悔やんでも悔やみきれません。

真矢からは、相手のことを日ごろから嫌いだと聞いていたので、「憎いのは分かるが、やり方が間違っている。そんなに憎い相手なら、正々堂々と目の前で訴えればいい。」と諭したのですが、真矢からは、私たち両親は何も分かっている「偽善者」だと言いつた。

調査報告書では、誰にやられたか分からない恐怖というものを、相手に植え付けたかたのではないかと分析していました。だからこそ、たとえ卑怯だと言われても名乗り出るわけにはいかず、それを両親にさえ理解してもらえなかった苦悩があったのでは・・・と推測し

ていました。
親として、真矢の本心を汲み取ってやることもできず、この事件を機に、私たちは真矢の信頼を完全に失ってしまったのだと思います。

誰1人として自分の想いを分かってくれない・・・
そう感じたときの真矢の苦悩はいかばかりだったか。大きな絶望と孤独を感じたことでしょう。そして修学旅行から帰宅した翌日の6月7日、真矢は事前に準備した薬品を自らの手で混ぜ、硫化水素ガスを発生させて死んでいきました。「たとえ死人となっても、彼ら4人は絶対に許さない！」と遺書を残して。

事件後間もなく、学校側は市教委の2人の先生をはじめとする、全10名程度で構成された調査委員会を立ち上げました。また同時に私たちも、支援して下さる方々と一緒に、何があったのかを知りたくて、幾度となく学校と対話する機会を持つことになりました。

しかし、そこで目にした学校の対応は、実にお粗末なものでした。「悪いことをしたとしても、その子たちにも人権があるので、他の生徒たちの目の前では叱れない」「調査委員会の結果報告が出るまでは、何があったか具体的には話せない」「被害にあっている生徒と、加害生徒たちを、今さら引き離すことは無理」と・・・

到底、自分たちで問題解決に努めようとする姿には、残念ながら見えませんでした。

そんな教師たちとの不毛なやり取りが一ヶ月ほど続き、絶望の末、私たちはついに学校との対話を打ち切りました。

しかし、このまま引き下がれない私たちは、調査委員会への遺族の参加・同席を強く求めました。もちろんこれは却下されたのですが、その交換条件として、週に一度、調査委員会の進捗状況を聞かせてもらうよう、学校長に詰め寄り、その場でこれを約束させました。そして、この報告のため、毎週我が家を訪れてくださったのが、先にご紹介した教育委員会の2人の先生だったのです。

このお2人は、昼夜を問わず、寝る間も惜しんで、真矢の友達だった生徒たちへ聞き取りを行ってくださいました。

当初、極度の大人不審になっていた彼らも、お2人の情熱に心を開いて、ポツリポツリと真実を話しはじめたそうです。真矢はどんな人格の子だったのか。何を理想としていたのか。加害生徒たちの言動は。そして具体的に誰がどんな被害を受けていたのかなど・・・。

また、真矢が書き残した詩やメモの数々。好きだった歌や物語。自殺直前の言動などから、真矢の心の揺れを丁寧に解明していただきました。そこには、親である私たちでさえ知らない、我が子の強い正義感、崇高な理想、そして優しさがありました。

また、多くの生徒たちから、話を聞いてくれたのは、この教育委員会のお2人だけではありません。

事件当初から関わっていただいた、少年課の刑事さんも、私たちの思いを汲み、真実を追究してくださいました。

2年生の冬に起こった、真矢へのいわゆる「パンツおろし事件」では、いつ、どの教室で、誰が、どうやって真矢に手を下したか。また誰が目撃し、どの教師が注意をしたのかまで、全ての情報収集に当たってくれました。

そのおかげで、これを事件として立件することができ、加害生徒4人に対して、結果的には半年間の保護観察処分という裁定がくだりました。

これとて、私たちから事件にして欲しいと頼んだわけではなく、警察の方から「被害届を出して家裁に送り、彼らに反省する機会を与えましょう！」と、アドバイスをされたからです。

3月初旬、加害生徒たちの保護観察処分が新聞報道されたときに「お父さん、良かったね・・・」と、電話の向こうで男泣きをしてくれたのは、この事件の担当刑事さんでした。

私たちは、真矢という大切な宝物を失いはしましたが、その真矢が、作り、育ててくれた様々な方々の「ご



縁」というものに、ずっと支えられて、今日まで生きてくることが出来ました。今も、真矢が守りたかったF君のご両親とは、家族ぐるみでお付き合いさせていただいていますし、小学校時代から、ずっと真矢を応援して下さった少年野球の関係者、また部活の仲間やそのご両親からも、いつも暖かい言葉をいただいています。

そして何より、毎月7日の月命日には、真矢とともに学んだ仲間たちが、部屋に入りきらないほどの人数で我が家に押しかけてきます。何をやるわけでもないのですが、朝早くから、夜遅くまで、他愛のない話をし、時に笑い、時に怒り、時に泣き・・・真矢と同じ空間で同じ時間を、ゆったりと過ごしてくれています。

今では笑顔の絶えない子どもたちですが、当時はいつも厳しい表情でした。でも真実を明らかにするために、警察や調査委員会に何度も足を運び、一所懸命話をしてくれました。本当に有難かったです。

そんな彼らも、高校に進学したときには、それぞれの学校の制服を着て我が家を訪れ、嬉しそうに私たちに披露してくれました。こうして毎月会える彼らの成長ぶりが、私たちにとっては何よりのプレゼントであり、そして真矢にとっても、何よりの供養となっているはずで

す。
息子を亡くした私たちが、こうして心穏やかに日々を過ごすことができるのも、真矢の想いを含め、事件の全容を明らかにして下さった教育委員会のお2人、少年課の刑事さん。支えて下さった仲間、そして子どもたちの笑顔のおかげです。

私たち遺族は、けっして無謀な要求をしているとは思っていません。愛する我が子が何を憂い、どうして死なねばならなかったのか？ただ事実を明らかにしたいだけなのです。事件が起こると、自らの保身のため、関係者は口を塞ぎ、事実を隠そうとします。また、加害生徒が明らかになっても、人権保護という名のもと、必要以上の神経を使い、彼らに何の指導もしてはくれません。

ある日突然、我が子に死なれているのに、その真相さえ知らされない。その痛みや苦しみが、なぜ理解できないのでしょうか？どう説明すれば分かってもらえるのでしょうか？我が子の死を、誰かの責任とし、誰かを吊るし上げるために、真相究明をしたいと言っているわけではありません。我が子に死なれた責任の重さというのは、遺族となった両親が、誰より重く受け止めています。

しかし、命を救えなかったという点では、遺族を含め、教師、クラスメイトなど、関わった全ての人たちに、大なり小なり、それぞれ責任があると、私は思っています。

全ての人たちが、各々の立場で責任を受け止め、自分たちに何が出来て、どう行動すべきだったのかを真剣に考え、そして反省し、その上で次の命を守り、育むため、行動を起こさなければなりません。

加害生徒となってしまった子どもたちについても同じことがいえます。自分たちがやってしまったことの愚かさに気付かせ、事件から目を背けず向き合わせた上で、徹底的に考えさせること。そして、心からの反省を促し、被害に遭った人たちへ謝罪させてあげること。彼らには「罰」を与えるのではなく、愛をもって「反省する機会」を与えてあげなくてはなりません。本気で彼らを救ってあげるには、大人も真正面から、本気で彼らと向き合うことが大切であり、それこそが大人としての務めではないでしょうか。

亡くなった子が何を思い、何に絶望し、そして何をどう変えたかったのかは、強い信念と志さえあれば、必ず明らかにすることができます。そして、それを解明するのは、間違いなく、残された者の責務です。

私たちが、こうして皆さんに明らかにしていただけたのですから、他のご遺族に対しても、出来ない理由は絶対に無いと信じています。責任をとりたくないというだけで逃げるのは、遺族や、亡くなった子に対する侮辱行為です。

お願いします。遺族となってしまった者たちに、我が子を失った悲しみ以上の辛さを、どうか背負わせないでください。この世に絶望し、亡くなっていった子どもたちに報いるためには、その子らが、もう一度生まれてみたいと思えるような世界を、残された者たちが作っていくしかないのです。自分たちに何が出来るのか・・・まだ何も見えてはおりませんが、遺族としての経験と想いを語りついでいくことが、真矢から託された使命だと考えます。

将来、別の世界で真矢と会えたときに、もう一度笑って話せる日がくることを楽しみにして、真矢から託されたバトンを、私たちも、次の世代に託していきたいと思

います。
最後になりますが、本日は私のつたない発言に最後までお付き合い頂き、誠にありがとうございました。ご清聴に感謝申し上げ、私の話を終わらせて頂きま



上村竜二さん(左端)をはじめ子どもを亡くした親などが発言したシンポジウム＝東京都港区で

学校でのいじめによる自殺や事故で子どもを失った遺族らの知る権利を考えるシンポジウムが十九日、東京都港区の人権教育啓発推進センターであった。遺族や有識者が、子どもの死後に学校側の情報開示が不十分な点や、遺族の思いをくみ取った調査や再発防止を図る必要性を訴えた。

いじめをなくし遺族の権利を守る活動をすすめるNPO法人ジェントルハートプロジェクト(川崎市)が主催。昨年十月に自殺した桐生市立新里東小六年の上村明子さん(当時一〇)の父竜二さん(五九)ら約五十人が集まった。

竜二さんは、明子さんの死後、学校や市教委から調査の経緯を知らされずに不信感が募ったことを説明。「親は学校のことを知りたがが教えられない。学校側は『再発防止』とよく言うが、そのためにも事実究明が必要だ」と述べた。

川崎市で昨年六月、友人をいじめから救えなかったと悔やむ遺書を残し自殺した中学三年の篠原真矢さん(当時一四)の父親(四七)も発言。市教委や外部の専門家らの調査委員会の報告で、真矢さんへのいじめも自殺の原因の一つであり、親が知らなかった苦悩なども分かり納得できた。

事実究明の必要性訴え 桐生・上村さんも発言

自殺や事故で子どもを失った遺族のシンポジウム

「遺族はわが子の死を誰かの責任にしてつるし上げたわけではない。なぜ死ななければならなかったか知りたいたい」と述べた。

京都精華大学文学部の住友剛准教授(三三)は、子どもが亡くなる多くのケースで、遺族が動かないと学校側の事実が明らかにならない問題を指摘。「学校や行政に専門家のサポートはあるが、遺族を支える専門家はほとんどいない」とも述べ、被害者や遺族に寄り添った専門家が事実解明を進める必要性を強調した。(中山岳)

2011年11月20日
東京新聞 群馬版

◆ 第8回ジェントルハートコンサート◆

去る11月12日、TOKYO FMホールにおいて第8回ジェントルハートコンサートが開催されました。今年のコンサートも会場の皆様と出演者が、いじめ・優しい心・命について感じる事の出来る、とても充実したイベントになりました。多くの皆様に会場へお越し頂きました事を心から感謝致します。また次回もお待ちしております。



榎村海香さん(Vn)、中村幸代さん(Pf)、大藤桂子さん(Vc)

今年は進行役を作曲家の中村幸代さんをお願いし、天国の子ども達のメッセージと、「生まれてきてくれてありがとう」という天国の子ども達への感謝のメッセージを朗読して頂きました。会場は涙と共に、なぜか穏やかな暖かい雰囲気になっていました。このステージのために、「ラフマニノフの交響曲第2番」を、ピアノ、バイオリン、チェロのトリオ用にアレンジし、圧巻のステージを作り上げて下さいました。

また、元気いっぱいステージを盛り上げてくれた森口博子さん。そしてパワフルなピアノ演奏とステージ上で涙を浮かべながらも歌い切った谷村有美さん。最後には明るい歌声と笑顔で会場いっぱい元気をくれた横浜市立上寺尾小学校合唱部の皆さん、本当にありがとうございました。



中村幸代さん(Pf)、森口博子さん(Vo)



谷村有美さん(Pf & Vo)

当日のアンケートの中にありました感想のいくつかをご紹介します。

◆20代女性

出演者の皆さんの歌に非常に気持ちがこもっていて、とても優しい気持ちになりました。ありがとうございました。非常にメッセージ性のこもったコンサートで、来てよかったと思います。

◆20代女性

改めて考えさせられた時間でした。ここで考えたことや思いをどう伝えるか・・・考えています。

◆40代男性

すごく良かったです！

谷村有美さんと森口さん目当てで来たのですが、どなたも素晴らしく、イベントの主旨もものすごく考えさせられるテーマなのに重苦しくならずにあたたかい感じで過ごせたのは、とても感動しました。



横浜市立上寺尾小学校合唱部のみなさん

◆30代男性

切ないけれど楽しい、悲しいけれど笑いもある、今まで参加したコンサートの中で最も複雑な心持ちになりました。子どもたちからのメッセージは響きました。

◆不明

合唱の子どもたちはじめ、出演者の「真剣な眼差し」に感動を覚えました。何事も本気で取り組む姿というのは人の心を打つものだと改めて感じさせられました。

◆ 校長日記 ◆

NPO法人ジェントルハートプロジェクト 理事・事務局長 川崎市立富士見中学校 校長 青山正彦

富士見中学校に着任してから8ヶ月が過ぎようとしています。30年ほど勤務していた本庁舎からは、歩いて5分ほどの距離でありながら全く異なる独特の文化を持った学校という勤務地に、少しは馴染むことが出来たかな。と、原稿を打ちながら改めて考えています。

改めてとしたのは、日常普段はほとんど意識をしていないからだと思います。なぜなら、「それほど」と言うのと大げさに聞えるかも知れませんが、相当に忙しい。まあ、私の場合には、「ジェントルハートプロジェクト」があり、「かわさき舞祭」がありと、やや自業自得的なところがありますので、「相当に忙しい」は、なんら比較根拠の対象の類にはならないだろと思っはいます。しかしながら、「校長経験者の寿命は短い」という、妙に説得力のあるご忠告も頂いておりますので、寒さも本格的になってきていますが、背筋を伸ばして、空でもいい、元気出していきたく思います。

さて、前回は公立学校という存在がもつ長所・特徴である「地域性」「平等性」「多様性」について載せてみました。読み返してみると、その不十分で未熟なことに赤面ではなく、青面に近いのですが、今回は、これまた臆面もなく「小・中学校の連携」について載せたいと思います。

公立学校はある種のまとまりや繋がりを持った「地域」＝「校区」を基盤としているところに大きな特徴があります。この「様々な人々が暮らす地域に根ざした」教育施設が、公立学校の大きな特徴となっていて、そしてこの「校区」には、公立学校として小学校も存在します。

中学校は、義務教育9年間を小学校と役割を分担しているわけですが、私にはこの義務教育9年間を貫く、いわゆる「柱」的な心棒のようなものが感じられていないんです。鈍いのかなあ…。今の感覚は「小学校教育＋中学校教育」って感じでしょうか。そして、どうにも、この「＋」の接続部分に不安定さを感じてしまうんです。

独特の「文化」の話ですが。一般行政とは異なる独特のこの「文化」は、学習指導要領に基づき、学校が意図的に組織的に編成した教育課程（これが制度的文化）、小学生・中学生が集団としての行動規範として創り出した生徒文化、教職員が集団としての行動規範として醸成した教職員文化、さらには生活の場や学習の場としての学校

環境などの多様な要因が複雑に絡まり、また相互に影響し合っ、学校にはそれぞれに独特の「学校文化」が生まれています。この学校文化は、学校の構成員のものの考え方や行動のあり方、人格形成にも影響をしています。言うなれば、潜在的カリキュラムとして大きな教育作用をもたらしています。また、学校像などにも出現しています。「中学校とはこういうものだ」って感じます。

要は、潜在的カリキュラムとして大きな教育作用をもたらす学校文化をそれぞれ持つ、小学校と中学校とが、義務教育9年間の役割の中で、上手く繋がってれば良いのですが、潜在的なものであるだけに、そこらへんに段差などがあると厄介となります。

現実には周知のごとく、小学校と中学校との間に「中1ギャップ」と言われる段差が生じています。そして、この段差・ギャップに落ち込んでしまう子どもたちが増えていることが問題となり、既に様々な対応・打開策が執られていますが、効果は残念ながら実感されていません。

文部科学省の調査によれば、小学校6年生と中学校1年生との間に、不登校が3倍、校内の暴力行為が6倍、いじめが3.5倍だとかという結果もあるようです。「教科の好き嫌い」では、算数・数学科での、55%から29%へと「好き」が半減しているのが特出しています。小学校教育と中学校教育との間をなだらかにして、連携すること、小学校と中学校が接続することがギャップに落ち込んでしまう子どもたちを救い、増加する問題の解決を促す義務教育9年間を見通し貫く「学校文化」の形成が必要ではないでしょうか。

段差を解消するスロープ的な、一貫した9年間のプログラム。

小学校の習慣形成から価値選択能力の形成へ、など様々な表現されてはいますが、いずれにしても、今を生きる子どもたちの成長や発達の過程に即した「連続性」と「一貫性」の確保に尽きると思います。

教育の方向性が振り子のように振れる様を遠目にしてきましたが、現実には相当厳しい。しかしながら、お国の将来を担う子どもたちのことだからこそ、先送りすることなく急がなくてはなりません。

◆ 活動のご報告と今後の予定 ◆

| 日付 | 主催者 | 都道府県 | 都市 | 参加人数 |
|------------|------------------|------|------|------|
| 2011/10/3 | 川崎市立新町小学校 | 神奈川 | 川崎 | 130 |
| 2011/10/5 | 新潟市立万代高等学校 | 新潟 | 新潟 | 780 |
| 2011/10/6 | 品川区子育て支援講座 | 東京 | 品川 | 40 |
| 2011/10/7 | 生命のメッセージ展 | 東京 | 港区 | 40 |
| 2011/10/14 | 三条市立第二中学校 | 新潟 | 三条 | 550 |
| 2011/10/17 | 平田青年会議所 | 島根 | 出雲 | 100 |
| 2011/10/26 | 国分寺市立第五中学校 | 東京 | 国分寺 | 150 |
| 2011/10/31 | 栃木県立小山西校等学校 | 栃木 | 小山 | 700 |
| 2011/11/2 | 能美市立寺井中学校 | 石川 | 能美 | 700 |
| 2011/11/7 | 三条市立第一中学校 | 新潟 | 三条 | 800 |
| 2011/11/9 | 聖学院中学校 | 東京 | 北区 | 200 |
| 2011/11/15 | 流山市西初石小学校教員研修会 | 千葉 | 流山 | 20 |
| 2011/11/15 | 新潟市立潟東南小学校 | 新潟 | 新潟 | 60 |
| 2011/11/17 | 新潟市立東西小学校 | 新潟 | 新潟 | 70 |
| 2011/11/18 | 川崎市立田島中学校 | 神奈川 | 川崎 | 150 |
| 2011/11/21 | 津南町立津南中学校 | 新潟 | 中魚沼郡 | 300 |
| 2011/11/21 | 千葉県立安房拓心高等学校 | 千葉 | 南房総 | 520 |
| 2011/11/22 | 川崎市立下作延小学校 | 神奈川 | 川崎 | 270 |
| 2011/11/24 | 横浜市立日野小学校 | 神奈川 | 横浜 | 220 |
| 2011/11/28 | 川崎市立野川小学校 | 神奈川 | 川崎 | 170 |
| 2011/11/30 | 酒々井町立酒々井中学校 | 千葉 | 印旛郡 | 500 |
| 2011/12/1 | 横浜市立領家中学校 | 神奈川 | 横浜 | 650 |
| 2011/12/6 | 佐倉市立臼井中学校 | 千葉 | 佐倉 | 370 |
| 2011/12/9 | 備前市立日生中学校 | 岡山 | 備前 | 120 |
| 2011/12/12 | 新潟市立潟東中学校 | 新潟 | 新潟 | 200 |
| 2011/12/14 | 荒川区教育研究会生活指導部会 | 東京 | 荒川 | 20 |
| 2011/12/16 | 千葉県立一宮商業高等学校 | 千葉 | 長生郡 | 560 |
| 2011/12/17 | NPO法人「青い空」シンポジウム | 東京 | 板橋区 | 300 |
| 2011/12/19 | 東京都立小山台高等学校定時制 | 東京 | 品川区 | 120 |
| 2011/12/20 | 千葉市立稲毛高等学校附属中学校 | 千葉 | 千葉 | 260 |
| 2012/1/17 | 越谷市教育研究会人権教育部会 | 埼玉 | 越谷 | 45 |
| 2012/1/31 | 静岡県立川根高等学校 | 静岡 | 榛原郡 | 230 |
| 2012/2/15 | 岡山少年院 | 岡山 | 岡山 | 60 |

【お詫びと訂正】

2010年5月発行のジェントルハート通信27号の巻頭コラムにおいて、『学校側の報告義務違反も』と表記した部分は『一審では学校側の注意義務違反も』の間違いでした。

関係者の方にご迷惑をおかけいたしましたことをここにお詫び申し上げます。



◇ 橋がかる ◇ ひととひとの出会い、そこにかかる橋

ここは毎回ジェントルハートプロジェクトに関わる方々の思いなどを自由にお書き頂くコーナーです。今回は新潟市立白新中学校校長の川端弘実先生にお願いいたしました。

『窓の外には』と『やさしい心』

新潟市立白新中学校 校長 川端 弘実

※『窓の外には』の挿入

今、聴いていただいた歌は、いじめを苦に自殺した小森香澄さんの詩に基づく「窓の外には」という曲です。私は、この曲を聴くたびに、胸が締め付けられるような思いになります。そして、香澄さんに「学校の役割って何？」「先生方って何？」と問われているような気がしてなりません。

昨年(平成22年)、群馬県桐生市において女子児童がいじめにより自殺し、その後いじめによる自殺が続発しました。新潟県教育委員会では、このことを深刻に受け止め、11月18日に、全県の市町村教育委員会と小中高・特別支援学校の校長が一堂に会して、「いじめ問題に係る緊急連絡会議」を開催しました。

前段の文章は、その会議の中で、当時義務教育課長を務めていた私が、「おわりに」の中で述べたものです。話しながら言葉に詰まってしまったのですが、それが逆に集った人たちからは、「心に響いた」との言葉をもらいました。

その後は、次のように続けました。

子どもたちのかけがえのない命を守り、命の大切さと尊さを伝えていけるのは私たち教職員であり、そのことに携われることに誇りと使命感をもたなくてはならないと考えます。(中略) 今回の出来事を真正面から見据え、「いじめはどの学校でも、どの子どもにも起こり得る。」という危機感と、一人一人の子どもの豊かな未来を守っていくという強い責任感と使命感を、この場で共有することを確認したいと思います。

新潟県教育委員会では、平成18年度に続発したいじめによる自殺に正対し、「いじめ根絶県民会議」を設立するとともに、平成19年度から3年間、教育委員会や学校を中核としながら、マスコミや各種団体・企業等の支援を受けて、「いじめ根絶県民運動」を全県の広範囲で展開してきました。

そして、昨年度からは、その運動を、児童生徒の社会性の育成に焦点を当てた「深めよう“絆” 県民運動」へと発展させるとともに、各学校では【いじめ見逃しゼロスクール】に取り組んでいます。

「いじめ根絶県民運動」では、毎年「いじめ根絶県民のつどい」を開催するとともに、想いを結実するために、つどいの中で『窓の外には』を歌ってきました。

私は、義務教育課に勤務する中で、多くの方から小森美登里さんの講演の感動の様子を聞くとともに、テレビ等の報道を通して、小森さんの活動の一端を知りました。そして、いつか小森さんにお会いしたい、ぜひ講演をお願いしたいとの想いが強くなっていました。

今年度、その念願がようやく実現したのです。

県教育委員会では、5月24日に「いじめ根絶県民会議」の場で、4月より着任した白新中学校では7月7日に、待望の講演をしていただくことができました。そして、7月7日の午後には、新潟市教育委員会学校支援課が主催して、新潟市の全学校の教職員を対象に、小森さんから講演をしていただきました。

本校での感動的な講演の様子は、坂 哲也生徒指導主事がすでに述べていますので、やや個人的なことを述べさせていただきたいと思います。

私は、講演を通して、恥ずかしいことに涙を流し続けていました。

「全ての子どもたちへ 生まれてきてくれてありがとう。」
「誰でも、自由の翼をもっている。」「人は皆、幸せに、自由に生きる権利をもっている。」そして「人は一人では生きていけない。」だから、互いに寄り添い・認め合い・支え合うことが大切！「言葉という宝物をもっと正しく使っていこう。」……一人一人に、素直な気持ちを内側から自然に沸き出させてくれる小森さんの講演に、私自身が一人の人間として没入し、内側の気もちと心が表出されていきました。

そして、「やさしい心が一番大切だよ。」との呼びかけに、止めどなく涙が溢れてきました。

小森さん！本当にありがとうございました。

実は、講演をお願いする直前に、本校でいじめが発覚しました。学活、道徳、個別指導などにチームで速やかに取り組んだ結果、そのいじめは早期に解消されました。

人間関係の中では、時としてトラブルが発生し、時にはいじめに発展していきます。そのトラブルやいじめを見逃すことなく、問題に正対して、人間同士のかかわりの中で乗り越えていくことで、逆に絆が深まっていきます。そんな人間関係づくりに取り組んでいきたいと考えています。

講演後、新潟祭の住吉行列への参加、修学旅行・自然体験活動、文化祭・演劇などの場面で、『やさしい心』をもち、互いに認め・支え・高め合う、感動の姿が続出しています。本当にありがとうございました。